

校長室から
(R元年度)

ひがしなら通心

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 26

令和元年8月3日(土)発行

8月1日の新聞記事

読売・産経新聞朝刊より

～全国学力・学習状況調査(全国学力テスト)の結果から～

「新聞 教材に適切」

文科省担当者

中学校の国語では試験用に作られた「全国中学生新聞」の記事を基にした問題が出題された。全国学力テストは今回で12回目だが、国語で新聞が題材になるのは6回目。頻出の理由を、文部科学省の担当者は「新聞は的確に情報を伝えるために文章が整理されており、教材として適切」と説明する。

平均正答率との関係を見ると、新聞を「ほぼ毎日読む」小中学生は、「ほとんど、または全く読まない」小中学生よりも、各教科で10点前後高い結果が出た。

小中学校の新しい学習指導要領では、本や新聞から集めた情報を活用し、考えを述べ合ったり、文章にまとめたりする活動が求められている。2020年度から使われる教科書の一部では、二つの朝刊1面記事を比べて、考えを述べ合う内容を盛り込むものもあるなど、教育現場では活用の幅が広がっている。

早稲田大の田中博之教授(教育方法学)は「新聞には教科横断的な幅広い話題が取り上げられている。まとまった文章を読むことで、自分なりの考えを持てるようになり、身についた読解力は他教科の基礎にもなっている」と指摘している。

小中学校とも、国語に課題を残した。府教育庁は「算数や数学の文章問題も、基礎的な国語力の差が出ている」と分析する。
小学国語で、「調査の『たいしやう』」を漢字で書く問題の正答率が36・2%で、全国平均を5・7%も下回った。封筒の宛名を書く中学の問題も、正答率54・2%と、小中ともに基礎でのつまづきが見られた。
中学数学の本体価格と電気代

基礎的国語力 他科目に影響

が異なる冷蔵庫2種のどちらを買う方が得かを考える問題は、まとまった文章を理解して数式で表現する必要がある。正答率が全国平均より1・6%低い33・1%だった上、無解答率も13・8%に達した。
府教育庁小中学校課の寺下憲志・首席指導主事は「数学の授業でなぜその公式を使うのかを説明させるなど、国語以外の教科でも言語活動を充実させたい」と話した。

「新聞読む子」高い正答率

小学国語「読まない」に12・2%差

新聞を読む習慣がある子供のほうが、正答率が高くなる。文部科学省が全国学力テストの結果を分析したところ、そんな傾向が明らかになった。

テストとともに行われた児童生徒への意識調査で、新聞を読む頻度を①「ほぼ毎日」②「週に1〜3回程度」③「月に1〜3回程度」④「ほとんど、または全く読まない」の4択で聞き、それぞれの層の平均正答率との相関を調べた。

その結果、小・中ともすべての教科でもっとも平均正答率が高かったのは①の「ほぼ毎日」と答えた児童生徒で、読む頻度が落ちるにつれ、いずれも平均正答率が低下した。中でも小学生の国語は①の平均正答率が73・2%だったのに対し、④の「読まない」は61・0%で、12・2%の差がついた。ほかの教科の①と④の差も、小学算数で10・2%、中学国語7・1%、数学10・9%と開いた。初めて実施された英語も①のほうが④より8・7%高く、相関関係が明らかになった。だが、新聞を読む児童生徒の割合は、減少傾向にあるようだ。①の割合は小学生で7・1%（前年度比0・4%減）、中学生で4・5%（同0・5%減）にとどまった。

文章を書いたり読んだりする際、原因と結果や、意見と根拠など、各段落や文がどのような関係にあるのか論理的に考えさせるように授業を工夫することが必要になる。
語彙を豊かにすることも含め、国語力は国語の授業だけでなく、伸ばすものではない。本や新聞などを読み、多くの言葉や文字に触れることが有効だ。

小6国語の平均正答率は、大阪府が60で、47都道府県中45位(奈良県と同じで、愛知県が47位で最下位)でした。自分の考えをまとめて書き表す正答率が低く、理解力があっても、活用力や表現力に課題があるようです。

国語は、全ての教科の基本です。本校でも国語を研究教科とし、書く力の育成に取り組んでいます。読書ノートやNIE(Newspaper in education)の取り組みもその一貫と考えています。ご家庭でも文字に親しむ取り組みをお願いします。

国語力読書で伸ばせ



学校現場では、文章やグラフ、アンケート結果とい

高木まさき

横浜国立大教授
(国語教育)

った複数の資料を関連付けるなど、授業改善が進んでいる。しかし、地域や学校によって取り組みに差があり、教育委員会が研修などを通じて教員の意識改革を促すことが求められる。学力の底上げにつながるはずだ。